

博多182

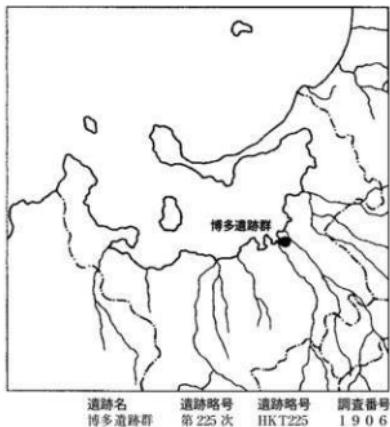
—博多遺跡群 第225次調査報告—

2022

福岡市教育委員会

博多182

—博多遺跡群 第225次調査報告—



2022

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果多くの歴史的遺産が培われ、今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市・福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査を行なって、往時のあり様を後世に伝えています。

本書は、令和元年度に行ないました、博多遺跡群第225次調査の成果について報告するものです。この調査では、中世を中心とする多くの遺構を確認することができました。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対するご理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料としてご活用いただければ幸いです。

また、最後になりましたが、今回の調査において、費用の負担等多くのご協力をいただきました、株式会社シンセイ・プラスワンをはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

— 例 言 —

- ・本書は、福岡市が令和元年度に調査を行なった、博多遺跡群第225次調査（博多区店屋町）の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- ・調査地点及び期間は以下の通りである。
第225次調査（博多区店屋町20-1 他）：平成31年4月1日～令和元年6月12日
- ・本書の執筆・編集は藏富士が行なった。遺物実測・製図は執筆者の他、野村俊之、大庭友子、井上加代子、熊楚御堂和香子の手による。
- ・銅製品の分析について、福岡市埋蔵文化財センター藤崎彩乃の協力を得た。
- ・本書における方位は座標北であり、遺構には、SE（井戸）、SK（土坑）、SP（柱穴）等の略号を使用している。
- ・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。
- ・また、土器の分類は以下の論文を参照している。
小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその時代」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
宮崎亮一編 2000 「太宰府条坊跡 XV - 陶磁器分類編 -」 太宰府の文化財第49集 太宰府市教育委員会

目 次

I	はじめに.....	1
1.	調査に至る経緯.....	1
2.	調査の組織.....	1
II	位置と環境.....	2
III	調査の記録.....	4
1.	調査の方法.....	4
2.	層序.....	4
3.	遺構・遺物.....	4
IV	まとめ.....	19

挿図目次

図1 博多道路群 (1/25,000)	2	図11 SK016 (1/20, 1/6)	12
図2 周辺の調査 (1/1,000)	3	図12 SK (2), SP (1/40, 1/3)	12
図3 調査範囲 (1/200)	3	図13 集石1・2 (1/20)	13
図4 土層 (1/200, 1/40)	4	図14 集石1・2出土遺物 (1/4, 1/3)	14
図5 道構配置 (1/100)	6	図15 土器集中区 (1/20, 1/3)	15
図6 SE010 出土遺物 (1/40, 1/6, 1/4, 1/3)	7	図16 SK 出土遺物 (1/4, 1/3)	15
図7 SE044・045・046 (1/60, 1/40)	8	図17 包含層出土遺物 (1) (1/3)	17
図8 SE020・044・045 出土遺物 (1/4, 1/3)	9	図18 包含層出土遺物 (2) (1/4, 1/3)	18
図9 SE046 出土遺物 (1/3)	10	図19 その他の遺物 (1/4)	19
図10 SK (1) (1/3)	11		

図版目次

図版1 ①I区 第1面全景 (北西から)	②I区 第2面 (北西から)
③I区 第3面 (北西から)	
図版2 ①瓦当出土状況 (西から)	②SE045・046 (南西から)
③出土遺物 (図8-23, 図14-7, 図16-9)	
図版3 ①調査区遠景 (東から: 左手前は第229次調査)	②II区 2面全景 (北西から)
③II区 3面全景 (北西から)	④SK043 (北東から)
⑤SK001 (北西から)	⑥SK031 (南東から)
⑦土器集中区 (南西から)	⑧埋甕 (東から)
図版4 ①集石1 (南西から)	②集石2 (南西から)
③SE044・045・046 (南西から)	④SE010 (南東から)
⑤SE044 (南から)	⑥SE045 (北西から)
⑦SE046 (北西から)	⑧土層2 (北から)

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成30（2018）年10月18日、株式会社シンセイ・プラスワンより博多区店屋町20-1他における土木工事に対して、埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた（事前審査番号30-2-685）。この地点は周知の埋蔵文化財包蔵地（博多遺跡群）内であることから、埋蔵文化財課では確認調査を行ない、現地表下2.6~3.0mで遺構の存在を確認した。これを受け両者協議の末、工事による遺跡への影響は避けられないという結論に至り、遺跡の記録保存（発掘調査）が行なわれることとなった。発掘調査の開始は平成31（2019）年4月1日。令和元年（2019年）6月12日にすべての作業を終了した。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

博多遺跡群第225次調査

調査委託 株式会社シンセイ・プラスワン

調査主体 福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課 課長 普波 正人（平成31～令和3年度）

調査第2係長 大塚 紀宜（平成31年度）

事前審査 係長 本田浩二郎（平成31年度）

主任文化財主事 田上勇一郎（平成31年度）

文化財主事 朝岡 俊也（平成31年度）

調査・整理庶務 文化財活用課 松原加奈枝（平成31～令和2年度）

井手 瑞江・内藤 愛（令和3年度）

調査・整理担当 埋蔵文化財課 調査第2係 藏富士 寛

博多225次				
遺跡調査番号	1906		遺跡略号	HKT225
地番	博多区店屋町20-1他		分布地図番号	48 千代博多
開発面積	230.7m ²	調査対象面積	109.8m ²	調査面積 128.4m ²
調査期間	平成31年4月1日～令和元年6月12日			

II 位置と環境

博多遺跡群は、御笠川と那珂川にはさまれた博多湾岸の砂丘上に営まれた遺跡で、南北1km、東西0.4kmの広がりを持つ。古代末～中世を中心とし、弥生時代から近世に至る存続期間を有する複合遺跡である（図1）。博多遺跡群の立地する砂丘は、東西方向にのびる3つの砂丘列によって形成されており、通常内陸側の2列を「博多浜」、外側の1列を「息浜」と呼ぶ。第225次調査地点は「博多浜」の北端部にあたり、近隣では第40次、第161次、第229次などの調査が行なわれている（図2）。

通りを隔てた北側で実施された第40次調査では、計4面の調査を行ない、中に明代の染付皿を中心とする大量の陶器類を収めた4号土坑を始めとする、12世紀後半～13世紀前半から16世紀にいたる遺構・遺物が確認されている（大場編1990）。また、南東側隣地にて行なわれた第229次調査では、計3面の調査から、15世紀後半から16世紀に位置づけることのできる、石基礎（SX004）や30枚以上の無文銭が出土した铸造関連遺構（SX008）等、40次調査とほぼ同様の12世紀後半から16世紀にいたる遺構・遺物を確認している。中でも遺構面掘り下げ中に出土した完形の竜泉窯系青磁「双層碗」の出土は特筆すべきだろう（常松編2021）。

だが、これら遺構・遺物にも増して、上述の諸調査において注目すべきは、道路状遺構の検出である。道路状遺構は13世紀後半から16世紀にかけて存続し、38次～229次～161次と南東～北西方向に延びた後、40次調査の成果にみられるように、90°屈曲した北東～南西方向の道路と交わるようだ。この道路状遺構の出現と存続が、周辺における遺構のあり方にどのような影響を与えているのか、今後の調査で明らかにすべき課題の一つといえる。

文献

- 大庭康時編1990「博多15」博多遺跡群第40次調査の概要 福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集
常松幹雄編2021「博多176」博多遺跡群第229次調査の報告 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1419集

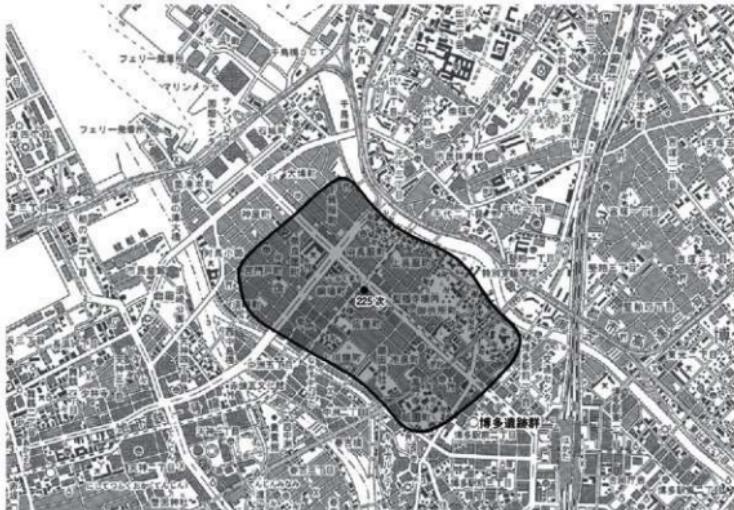


図1 博多遺跡群 (1/25,000)

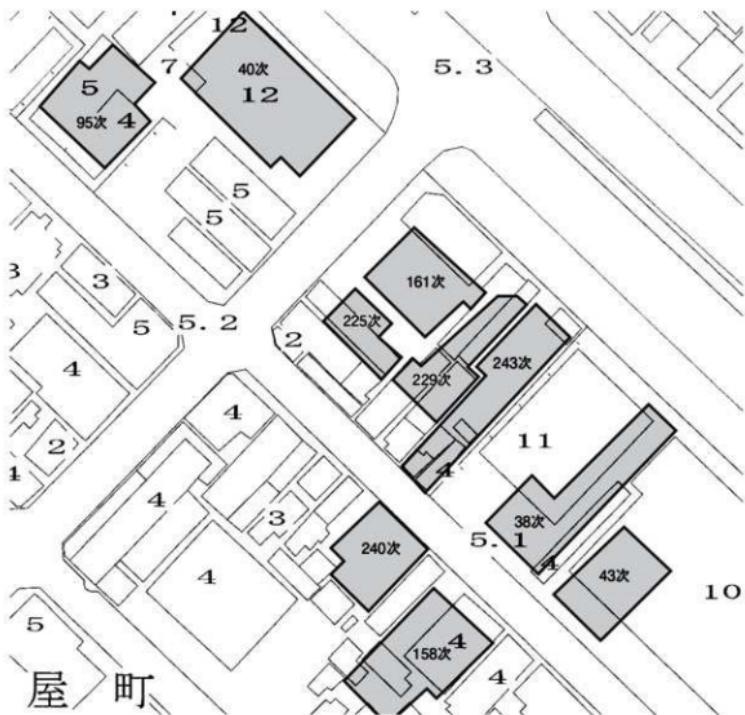


図2 周辺の調査 (1/1,000)

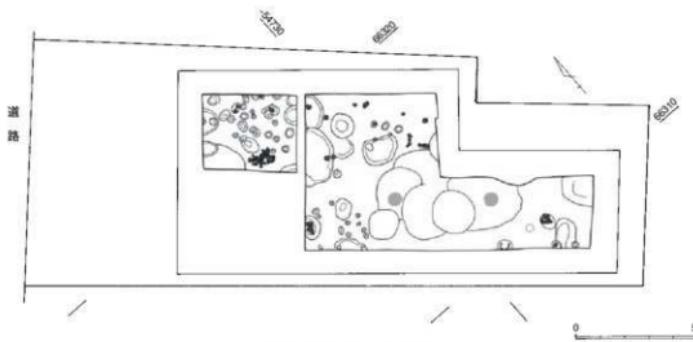


図3 調査範囲 (1/200)

III 調査の記録

1. 調査の方法

まず重機により、現地表下3m程の土砂鉱取りを行ない、褐色砂質土を主体とする標高2.3m前後に調査面（第1面）を設定し、作業を開始した（図4）。そして、遺構を確認しながら手掘りによる深さ30~40cm程の掘り下げを実施し、標高1.9~2.0m前後を第2面、標高1.5~1.6m前後を第3面とし、記録の作成を行なった（図5）。各遺構面は、土質の変化をみながら設定しているが、後述するように、当調査地点の遺構は自然堆積層の上に形成されており、調査区全体を覆う堆積層は確認されておらず、各面は厳密な意味での考古学的有意性を持つものではない。

調査に伴う排土は場内で処理しており、調査区を2区（I・II区）に分け、最初に南東側の調査区であるI区から調査を開始し、その終了後排土を搬出・反転し、II区の調査を行なっている。

2. 層序

第225次調査では調査区周間に土留めが施されており、先に触れたように調査着手前に土留め内の土砂鉱取りを行なったため、場内における標高2.3m以上の堆積状況の確認は行なっていない。

調査では、域内の3地点で土層図の作成を行なった（図4）。土層は、標高1.5m前後において顕著に認められるように、標高2.0m以下では基本的に薄い堆積層が幾重にも重なった状況を示しており、当地点は河川等による自然堆積層の上に営まれていたことが分かる。あえて各土層の示す堆積の共通点をみると、いずれの土層図にも、黄褐色砂層や明褐色砂層に代表される、標高1.9~2.3m前後に堆積する比較的綺麗の強い層（層群II）があり、その下の標高1.6mまでは、暗褐色層や灰褐色砂層が薄く堆積する層群IIIが存在する。大きな変化は生じるのはこれ以下であり、土層1では暗褐色砂層などが堆積する層群IVのに対し、土層2・3では、間に白砂層を挟んで、有機物を大量に含み粘性の強い、暗茶褐色層が厚く堆積する（層群V）。この層は、調査区南側では認められず、調査区中央に位置する井戸群（後述）より北側に存在するようだ。層群IV・V以下はいずれも灰砂・灰粗砂等が堆積（層群VI）し、湧水に至る。層群IV・Vといった堆積状況の違いは、調査地点が博多浜の北側縁辺部に当たることを示しているといえる。そして調査は、大概いえば、第1面（層群I上面）、第2面（層群II上面）、第3面（層群IV・V上面）を対象として行なったと表現することもできるだろう。

3. 遺構・遺物

（1）井戸（SE）

I区の中央にまとまって6基が確認できた（SE007・010・020・044・045・046）。SE007は井戸瓦組による近世段階のもので、今回は調査を行っていない。そして、SE020は井側を確認しておらず、平面形態より井戸である可能性を考えている。

SE010（図6、図版4-④）

井戸群中央に位置するSE007の北西側に位置する。平面は楕円形を呈し、井戸の掘方は急角度で、その中央に井側である0.5~0.6mの木桶を配する。

出土遺物（図6-1~13）

1は口禿の碗。口縁部内側と外面下半は無釉。2は龍泉窯系青磁の小碗。3は青磁皿で内面に花文。4は口禿の白磁小皿で、口縁部には黒褐色の顔料が付着する。5~8は土師皿、9が碗。いずれも底部は糸切り。10は滑石製の平玉、11は瓦質のすり鉢で、井側内出土。12・13は平瓦。

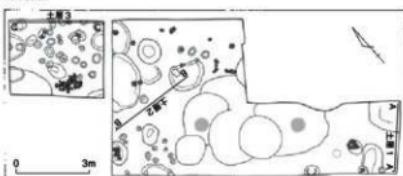
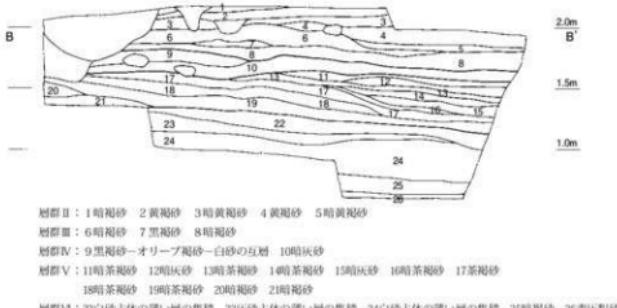
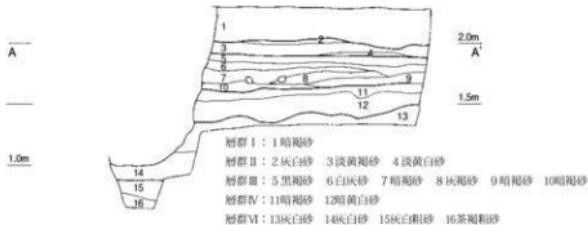


図4 土層 (1/200, 1/40)

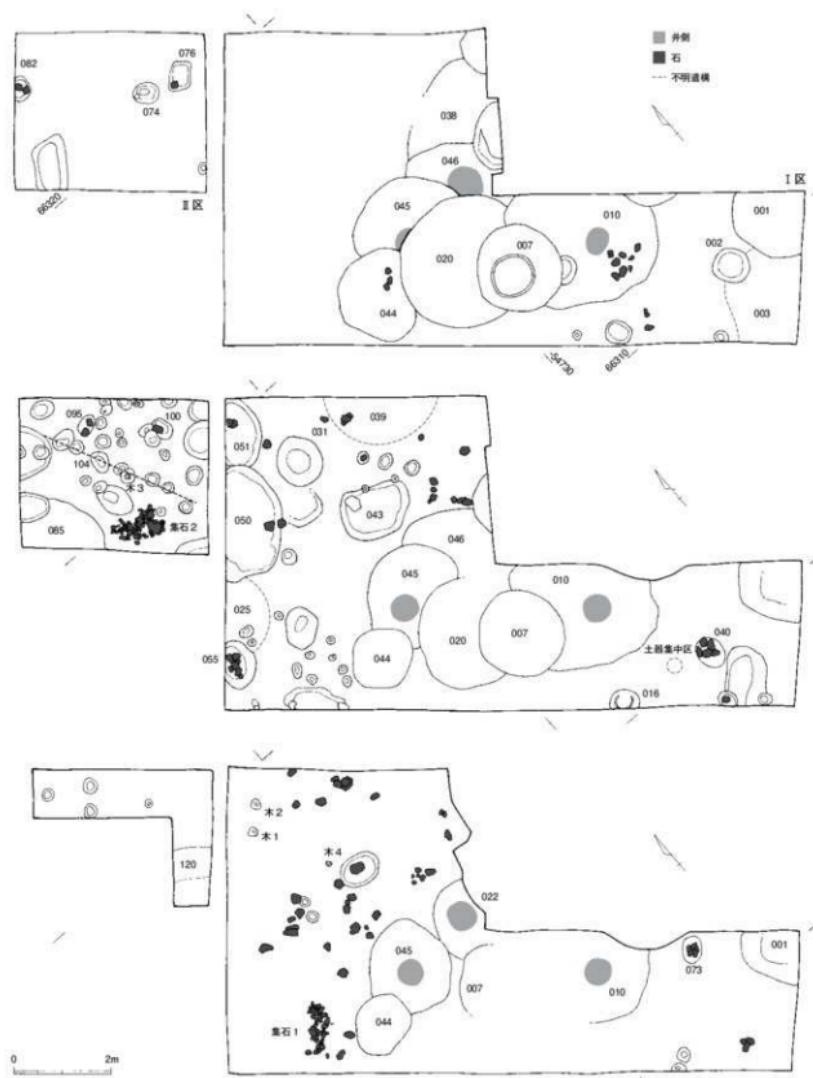


图5 道構配置 (1/100)

SE020

SE007北側に位置し、平面は径2.7mの円形を呈する。井側は確認していない。

出土遺物（図8-1～6）

2はI類の竜泉窯系青磁碗で、内面見込みに花文を施す。底面には墨書。3は同安窯系青磁皿で、内面見込みに櫛目による花文を施す。4は白磁碗。5は陶器盤で、内面に褐釉による施文。6は褐釉を施す陶器壺、1は土師質の釜で、外面に煤が付着する。

SE044（図7、図版4-⑤）

井戸群の西端に位置し、SE045・020の一部を切り込んでいる。平面は、径1.1～1.3mのいびつな円形を呈し、SE010と同じく井戸の掘り込みは急角度である。井側は確認できなかったが、SE010と同じく、木桶である可能性が高く、掘方の途中には一条の白色粘土帯が巡っている。

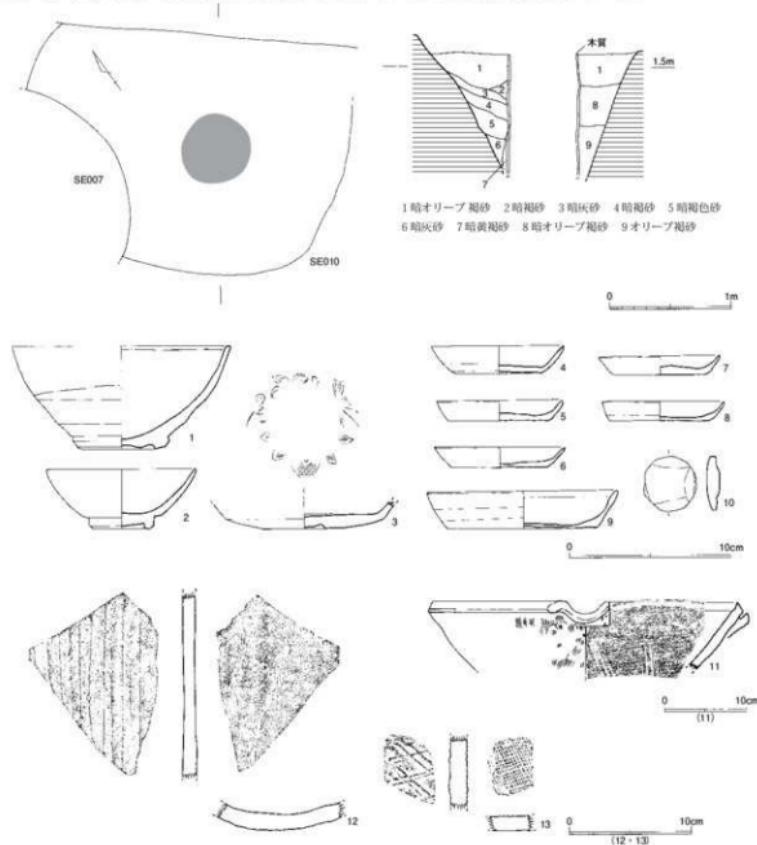


図6 SE010 出土遺物 (1/40, 1/6, 1/4, 1/3)

出土遺物 (図8-7・8)

7はV類の白磁碗で、外面には縱方向の範描文、内面には短い櫛目文を施す。8は白磁碗底部片。

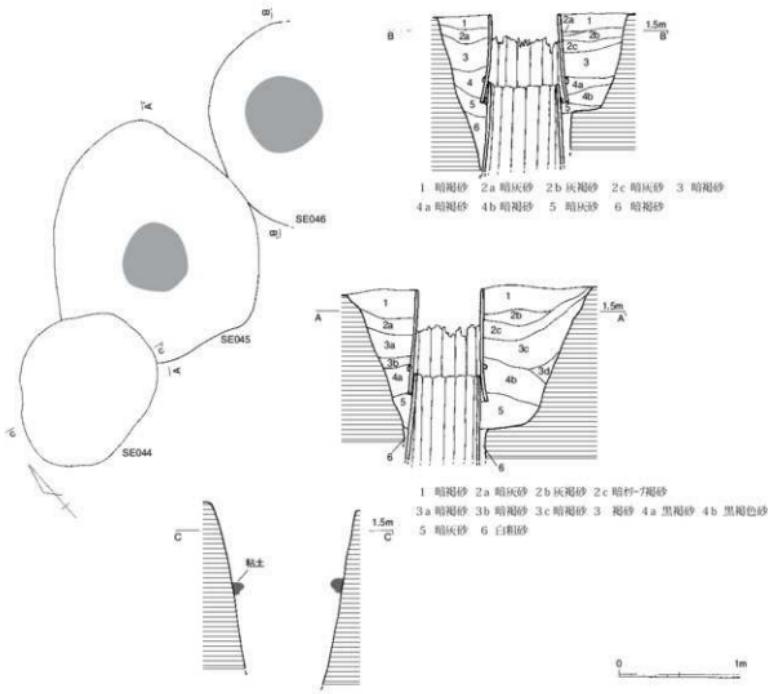
SE045 (図7、図版4-⑥)

井戸群北側に位置し、西側をSE044に切り込まれ、東側ではSE046を切り込んでいる。平面は1.8~2.0mの楕円形を呈し、中央部には径50~60cm程の井側を検出した。井側は木桶の重ねたもので、2段分が遺存しており、2段目の縦ぎ目部分にはタガが遺存していた。

井戸の掘方は急角度であり、特に1段目半ば辺りからは、ほぼ直に掘り下げを行なっており、坑の大きさは井側のそれと大差ない。また、掘方北東側では、この井側1段目の半ばあたりで、テラス状の平坦面を作り出しており、井側と掘方壁面との隙間が広く設けられている。

出土遺物 (図8-9~30)

11・13・16~19・22は井側内より出土。9・11・12・14は白磁。9はIV類の碗。11・12・14はV類の碗で、11・12は内面に櫛目文を施す。10・13・15・16は青磁。10は竜泉窯系青磁皿。13はI類の竜泉窯系青磁碗で、内面見込みの文様は不鮮明。15は安同窯系青磁皿。17は褐釉陶器の壺。18は瓦器碗、19・20は土師壺、21・22は土師皿である。19・20・22は底部糸切り、21はヘラ切りによる。23は瓦当。土師質で暗赤褐色を呈し、花弁2が認められる。



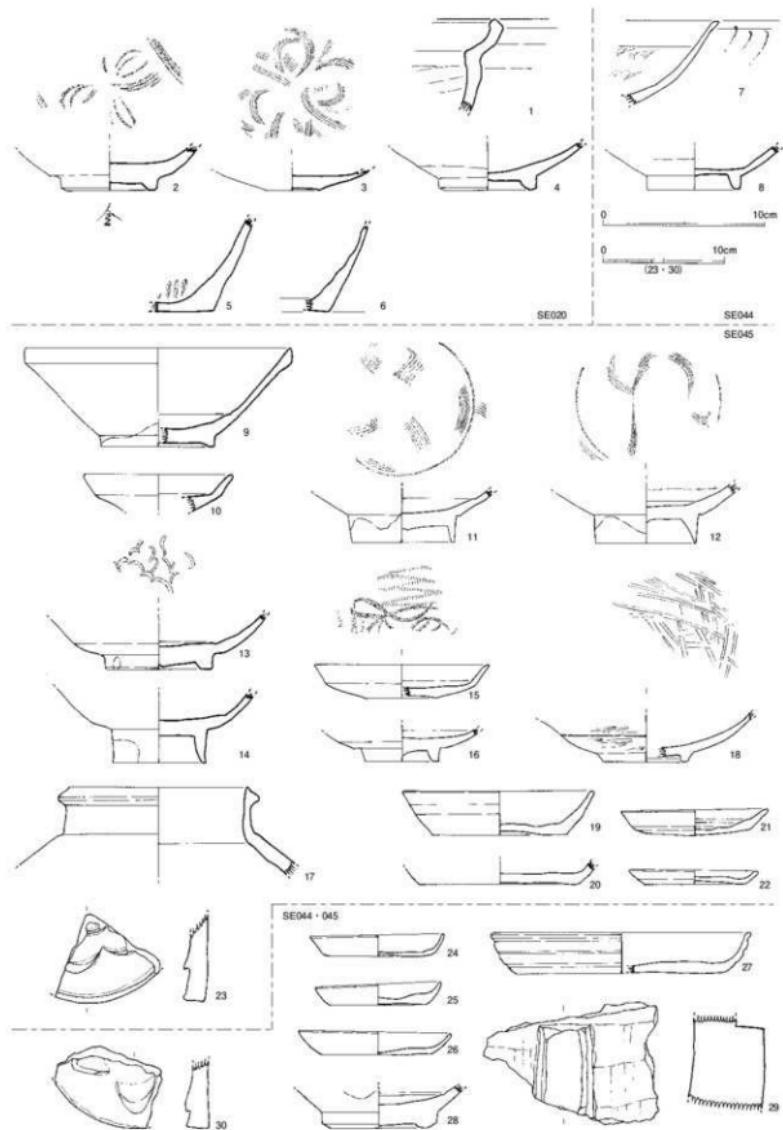


图 8 SE020·044·045 出土物 (1/4, 1/3)

SE045・046検出中の出土遺物（図8-24～30）

SE045、SE046調査中に出土したが、その帰属が定まらなかったものについて、以下に述べる。24～26は土師皿、27は土師坏である。いずれも底面は糸切りによる。28はIV類の白磁碗。29は滑石製の石鍋で、口縁近くの外面に縱長の把手が付く。30は瓦当。明赤褐色を呈し、2つの花弁が残る。先に述べたSE045出土品（図8-23）に類似する。

SE046（図7、図版4-⑦）

井戸群北東側に位置する。遺構の一部は調査区外にあり、未掘である。西側をSE045に切り込まれる。平面全形は明らかではないが、おそらくSE045と同程度の梢円形を呈するものだろう。このSE046は多くの点で、SE045に類似する。中央部にはSE045と同規模の、木桶の重ねた井側を有し、井戸の掘方とも急角度で、掘方北東側では、井側1段目の途中でテラス状の平坦面を造り出し、井側と掘方壁面との隙間が広く設けている。切り合い関係にはあるが、この両者は高い関連性を持っているといえるだろう。井側は2段分が遺存しており、その縫ぎ目部分である、一段目上部と2段目の下部にはタガが残る。

出土遺物（図9）

1はIV類の白磁碗。2はIII類の初期高麗青磁碗で、豊付と内面見込みに目跡が残る。3は同安窯系青磁碗、7は同皿である。4・6はI類の竜泉窯系青磁碗で、6は内面に蓮花文を施す。5は合子で、口縁部と外面下半は露胎。8は白磁皿で、底面に墨書き。9・10は陶器壺。9の外表面は口部以外が露胎で、口縁部には目跡。10は底部近くの外面に目跡が残る。11は土師坏で、底面は糸切り。

（2）土坑（SK）・土器転用墓（ST）・柱穴（SP）

土坑は第1・2面調査時に確認したものが大半を占める。図5中においても、掘り込みが浅く立ち上がりが明確では無いものも多く、遺構面凹部等の誤認である可能性もある。明確な掘り込みを確認できた土坑は以下の諸例であり、その意味では遺構密度はさほど高いものではないといえるだろう。柱穴はII区第2面を中心に確認でき、分布に偏りをみせている。

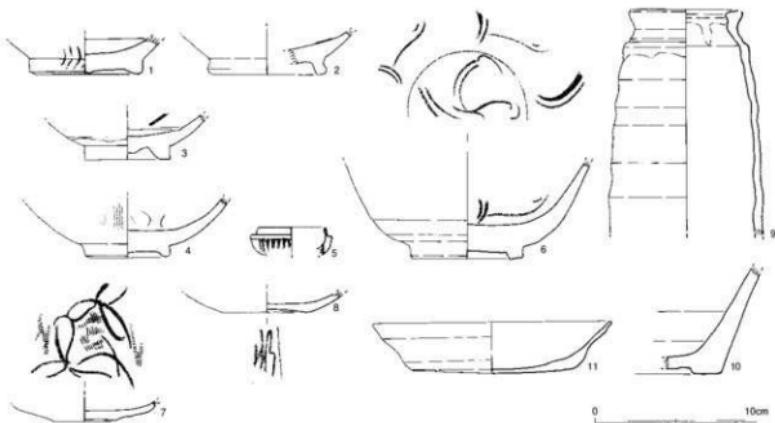


図9 SE046出土遺物（1/3）

SK001 (図10、図版3-⑤)

第1面の調査I区南西端で一部を確認した。平面略方形を呈するものか。壁面の立ち上がりは急で、深さ1.3mを測る大型の土坑である。遺物出土量は少ない。

出土遺物 (図10-1~4)

1はIX類の白磁皿。口禿で、底面まで施釉される。2はIV類の白磁碗、3はVII類の白磁皿である。

4はI類の竜泉窯系青磁碗。

SK002 (図10)

第1面の調査I区南西側で確認した。平面径0.6m程の円形を呈する小型の土坑で、深さは0.2m。底面は平坦である。

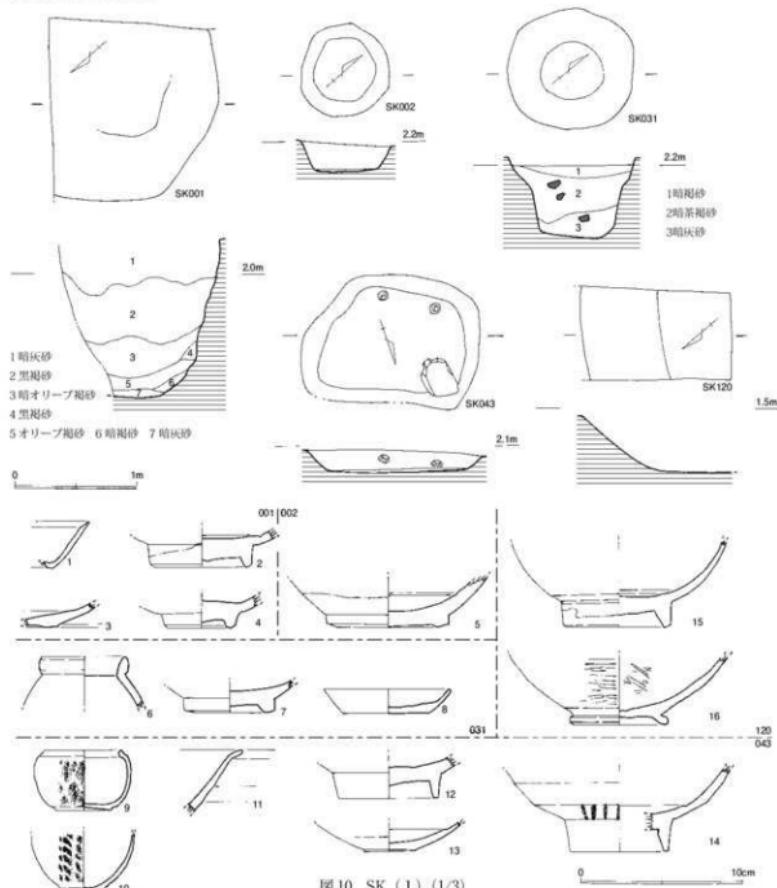


図10 SK (1) (1/3)

出土遺物（図10-5）

5はIV類の白磁碗である。

SK031（図10、図版3-⑥）

調査I区北寄りに存在する。第1面で確認していたが、正確に認定できたのは第2面である。径1m程の円形を呈する土坑で、底面近くの壁面は垂直に立ち上がる。深さは0.6m程で、底面は平坦。

出土遺物（図10-6～8）

6は陶器壺、7はIV類の白磁碗、8は土師皿である。

SK043（図10、図版3-④）

調査I区北寄りに存在する。第1面で確認していたが、正確に認定できたのは第2面である。3辺が直線状を呈しており、本来は平面長方形であった可能性を考えておきたい。浅く底面は平坦である。図に示す通り、土器や礫等に混じり合子2点が出土したが、混入か否かの判断はつかなかった。

出土遺物（図10-9～14）

9・10は共に青白磁の合子である。10は底面を打ち欠きにより、平坦にしている。11～14は白磁である。11は碗で口縁部が大きく外反する。12・14はV類の碗、13はVI類の皿である。

SK120（図10）

調査II区第3面の南端で確認した。大型の土坑であるが、続きがI区で確認できず、その認定には問題を残す。深さは0.4m程で、壁面の立ち上がりは緩やか。底面は平坦。

出土遺物（図10-15・16）

15はV類の白磁碗、16は瓦器碗である。

ST016（図11）

調査I区第1面の南寄りで確認した。径1.2mの平面円形の土坑内に火鉢を据えたもので、内部の底面近くから銭6枚がまとまって出土しており、墓(ST)であると判断した。内部には火鉢破片に加え、礫等が混入しており、木蓋をして礫を重石とした可能性を想定している。

出土遺物（図11、図版3-⑧）

火鉢は口径38.8cm、器高29.2cmを測り、完形近くに復元できる。瓦質で、底面には3足を有する。底面近くの外面に1条、口縁近くの外面には2条の突帯があり、口縁部の2突帯間にはスタンプによる雷文を施す。内面は細かいハケ目調整が行なわれている。出土した銭はすべて北宋銭であり、内訳は元豐通寶（初鋤年：1078年）2、嘉祐通寶（1056年）1、太平通寶（976年）1、政和通寶（1111年）1、皇宋通寶（1038年）1である。

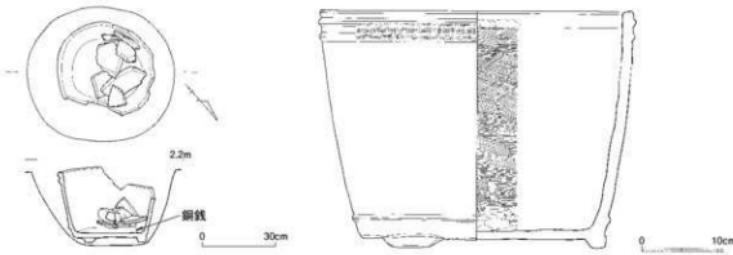


図11 SK016 (1/20, 1/6)

内部に礫や木材を有する土坑（SK）・柱穴（SP）（図12・13）

今次調査では、第2・3面を中心多くの礫が散布する状況を確認できた。また検出した土坑・柱穴にも、内部に礫を持つものがいくつか存在する（図13）。中でもSK040・055・073のように、礫が集中して存在するものは、建築物等の基礎である可能性も指摘できる。

柱穴内で検出された木材（木1～3）は、先端が平坦に仕上げられており、杭（木4）では無く、柱材等等とみなすことができる。図5に示す通り、柱穴の中には直線的に並んでいるものが存在し（第2面破綻部分）、柱の一部（木3）はこの柱穴群に含まれている。したがってこれら柱穴列が解等の施設の遺構である可能性も考えておきたい。

出土遺物（図12）

1は白磁皿。SK040出土。2は陶器壺、3は陶器捏鉢で、外面が被熱し煤が付着する。4は土師皿で、底面は糸切り。2～4はSK055出土。5はIV類の白磁碗。6は青磁の小碗で、外面に蓮弁文を施す。7は土師坏で、底面は糸切り。5～7はSK074出土。8は青白磁の皿で、内面に蓮花文等を描く。9は青磁小碗、10はII類の白磁皿。8～10はSK076出土。

（3）その他の遺構（SX）など

SX201（集石1）（図13、図版2-①、図版4-①）

調査I区第3面西側で検出した遺構であり、長さ1.1m、幅0.5mの範囲に石材等が密集して存在している。掘り込みはごくわずかで、明確ではない。ほぼ平らに敷き詰められており、上面の高さは標準1.9m前後で、集石自体の厚みは10cm程度と比較的乏しい。集石の表面及びその内部には瓦や土器等が混入している。集石1は北東—南西方向に延びており、現在の地割りとほぼ等しい。

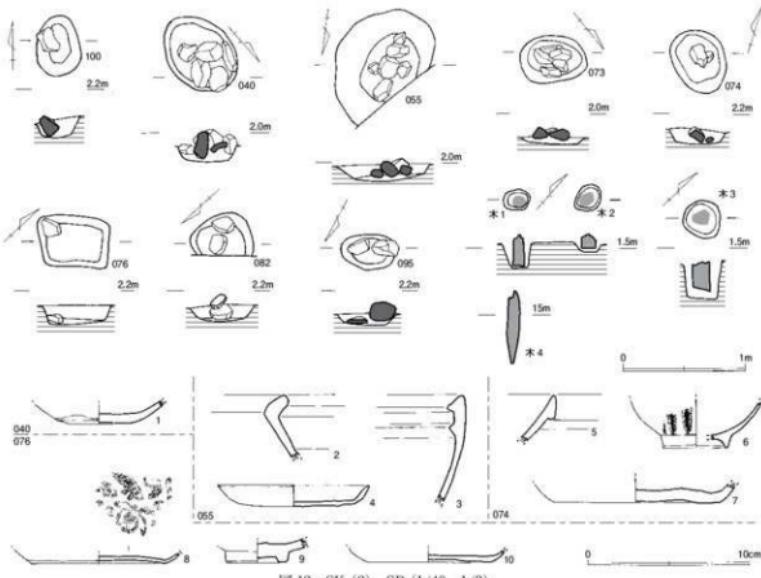


図12 SK (2), SP (1/40, 1/3)

出土遺物（図14-1～11）

1はV類の白磁碗。2は瓦器碗の口縁部片。3は陶器、4は褐釉陶器の壺底部片。5は黒色土器。6は石鍋で、縱長の把手を有する。7～8は須恵質の瓦である。7は軒丸瓦。径13.5cmで、1条の圓線を巡らし、内部に草花文を施している。

SX202（集石2）（図13、図版4-②）

調査II区第2面で検出した遺構であり、長さ1.2m、幅0.4～0.7mの範囲に石材等が密集して存在している。掘り込みは確認できなかった。集石1と同じく、ほぼ平らに敷き詰められており、表面及びその内部には土器等が混入している。上面の高さは標高2.2m前後であり、集石1に比べ高い位置にある。集石2も1と同じく、10cm程度の厚みしか無い。集石2は集石1の直交方向にあたる、北西-南東方向に延びる。

出土遺物（図14-12～15）

12は土師質の壺、13は陶器の壺、14は滑石製の石鍋で、断面台形の鍔を巡らせている。15はI類の竜泉窯系青磁碗。茶褐色に変色している。

土器集中区（図15、図版3-⑦）

調査I区第2面のK040西側に位置し、50cm四方程の狭い範囲に土師碗・皿や白磁が集中して検出された。一括して保管・埋納もしくは遺棄された後、土圧等で破碎したものだろうか、多くが完形近くに復元できた。調査時、周囲に掘り込みは確認できていない。

出土遺物（図15）

1～8は土師皿である。底面は1・4・7が糸切り、その他はヘラ切りによる。6は内面に板目の圧痕を残す。9・10は土師壺。いずれも破片資料で、9は底面糸切りによる。11・12は白磁皿で、II類、VI類に属する。

（4）他の遺物

SK出土遺物（図16）

1は高台を有する須恵器壺身で、SK003出土。2・3は青白磁の合子で、2はSK104、3はSK039出土。5はV類の白磁碗、6は土師壺で、共にSK038出土。4は白磁の四耳壺、9は須恵質の瓦当で、共にSK025出土。9は圓線を巡らし、草花文を施したもので、SX201（集石1）出土遺物（図14-7）と同種のものであるが、同范では無い。7は同安窯系青磁碗、8は陶器壺で、共にSK085出土。10は土師質の瓦当で、花弁1が残る。SE045等の出土遺物（図8-23・30）と同種である。

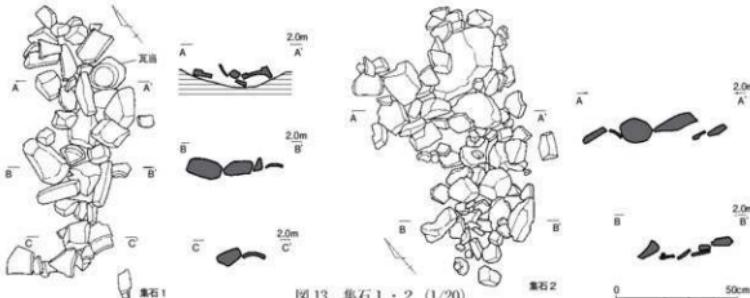


図13 集石1・2 (1/20)

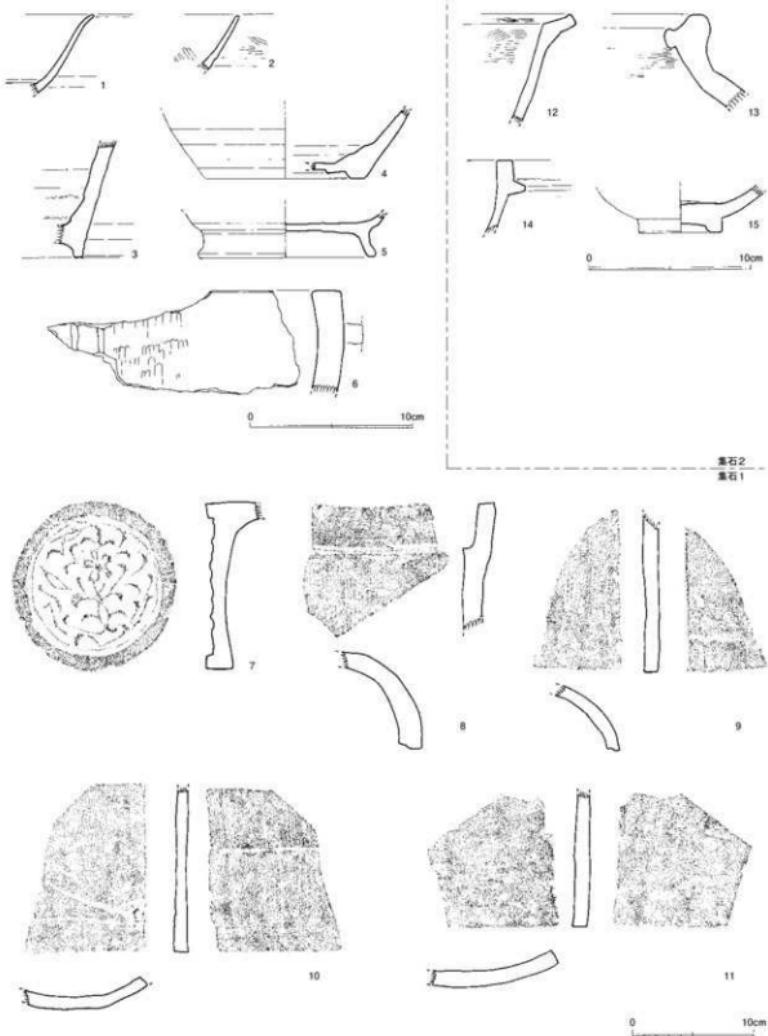


图 14 集石 1・2 出土遺物 (1/4, 1/3)

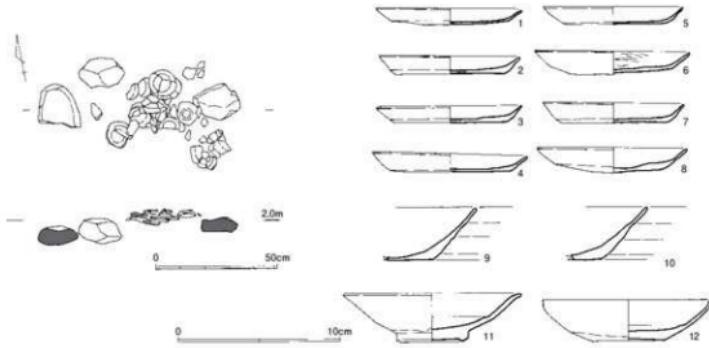


図15 土器集中区 (1/20, 1/3)

包含層出土遺物 (図17・18)

図17に陶磁器碗・皿等を示す。1～5・8は白磁碗。1・2はIV類、3はV類、5はVI類で、4・8は皿類である。

6・7は竜泉窯系青磁碗。6はI類、7は浅形碗で、内面に片彫文や櫛目文を施す。9は同安窯系青磁の小碗、10はI類の白磁小碗。11・14はIII類の初期高麗青磁碗で、内面見込みや疊付に砂目を残す。12はI類の初期高麗青磁。13は天目。15は竜泉窯系青磁碗のIII類で、外面に鎬蓮弁文を施す。16・17は同安窯系青磁皿。18～21・23～25は白磁皿・小碗。18・19はIV類、20はIX類、21は皿類、23はII類、24はVII類、25はIII類。22はIII類の竜泉窯系青磁碗で、外面に蓮弁文を施す。26・27は青磁皿。28・29は合子。

図18にその他の遺物を示す。1～3は長胴の壺。4・5は四耳壺で、4は陶器、5は白磁。6・7は捏鉢。8～10は瓦器碗で、10は近畿地域（楠葉型）のものか。11は足鍋。12・13は土師壺、14は丸壺、15・16は土師皿である17は滑石製の石鍋、18は砂岩製の低石、19は花崗岩製の凹石。20は滑石製の紡錘車。21・22は瓦。23・24は木器。23が箸、24は下駄で、鼻緒を通す壺穴は無い。

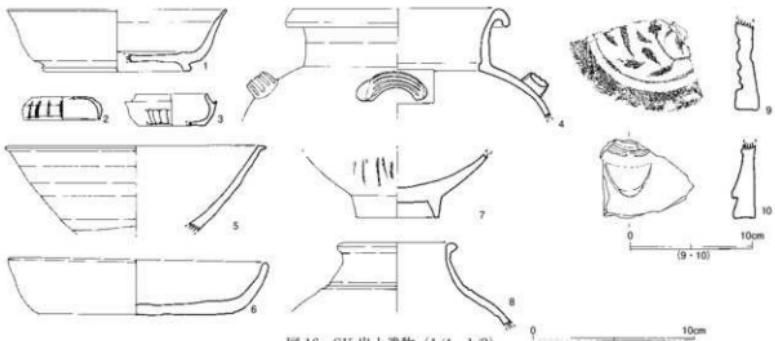


図16 SK 出土遺物 (1/4, 1/3)

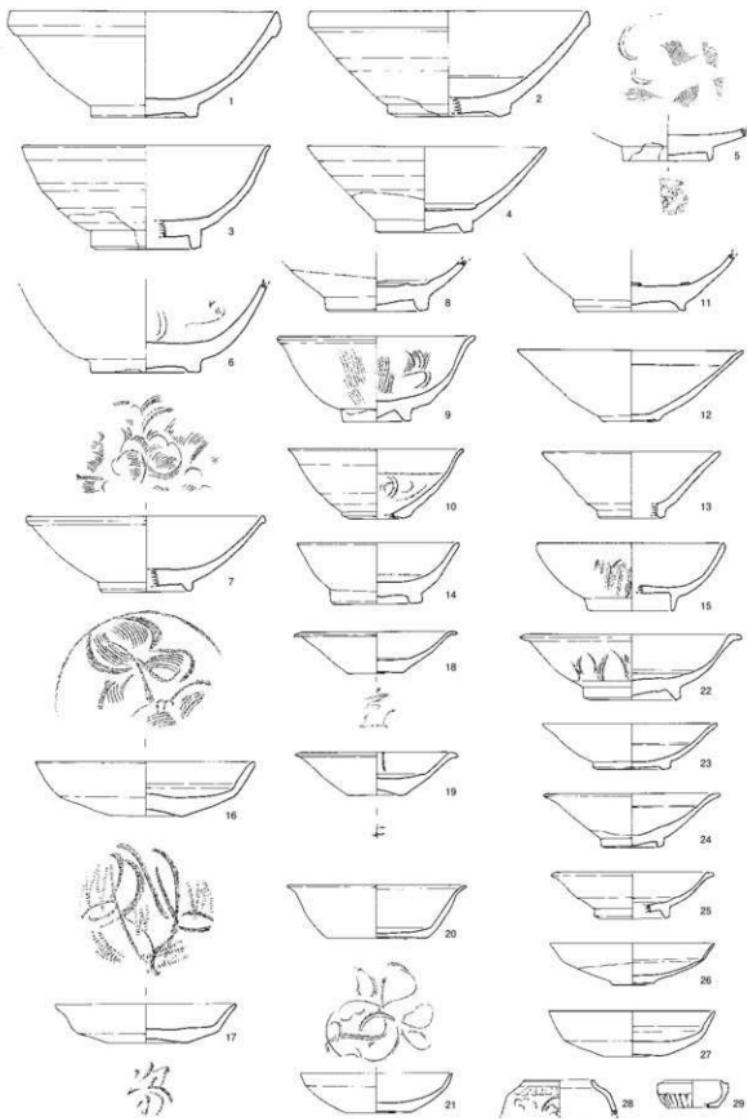


图 17 包含层出土遗物 (1) (1/3)

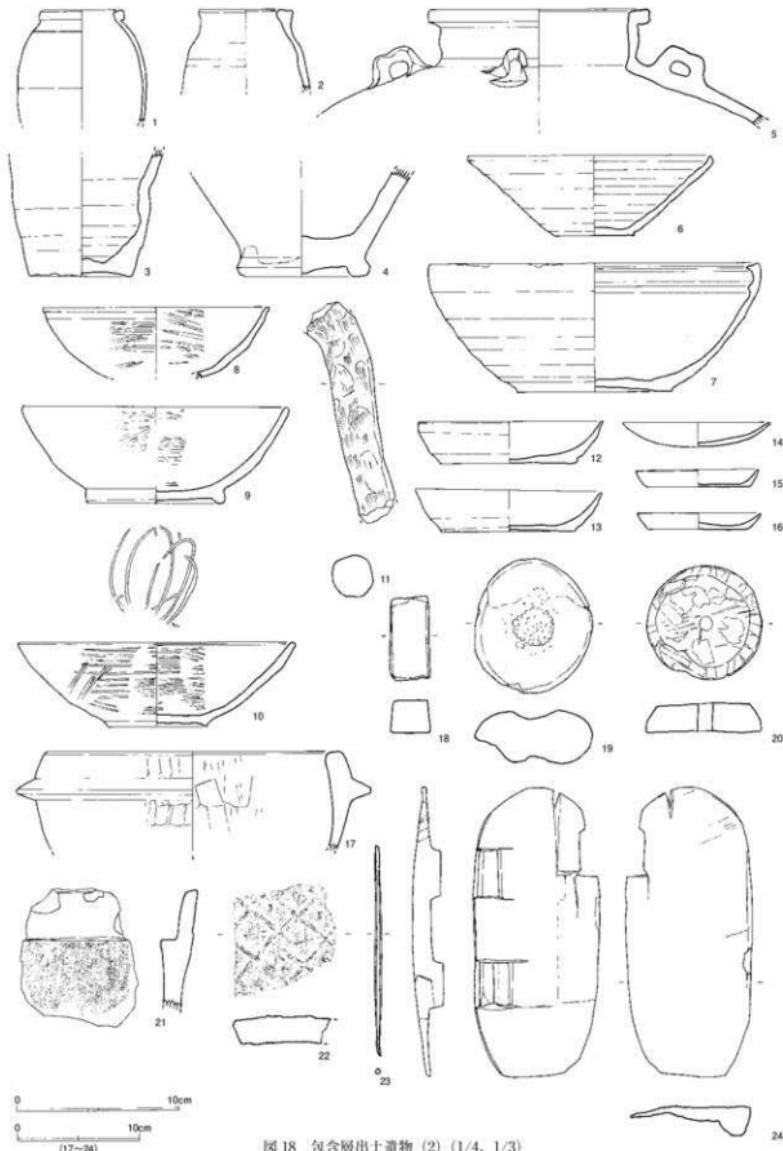


图 18 包含层出土遗物 (2) (1/4, 1/3)

その他の遺物（図19）

ここでは、滑石製品や漁撈具等、特徴的な遺物を取り上げる。1～7は滑石製石鍋片を使用した転用品で、鋤部分に穿孔を施すもの（1・2）や胴部片に穿孔を施すもの（4・5）、平面馬蹄形を呈するもの（3）、穿孔部の片面に突起を造り出すもの（6）がある。7～11は滑石製の石錘で、いずれも切り目を有する。12は土器片錘。13は蛸壺。破片をふくめても出土はごくわずかである。14～16は土錘。14・15は管状、16は切り目を有する。

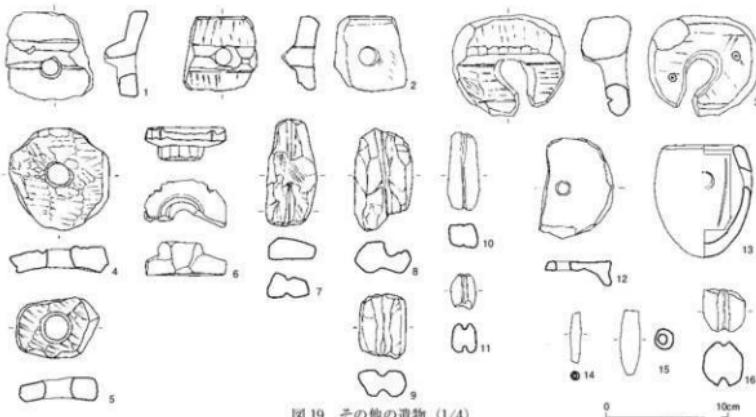


図19 その他の遺物（1/4）

IV まとめ

以下に調査成果を列挙し、まとめに代えたい。

今次調査地点は、標高2m前後以下が自然堆積層となっており、調査区北側にのみ堆積する、有機物を大量に含む暗茶褐色砂層の存在から、砂丘（博多浜）の縁辺部であったことが分かる。

遺構では、11世紀後半～近世に至る遺構・遺物を確認することができた。今回調査の主要遺構である井戸は井側瓦組が1基、桶組が4基存在する。後者は構造上の類似性から大きく二分（045・046と010・044）することができ、切り合ひから前者から後者への変遷が想定できる。時期は12世紀後半に位置づけることができよう。井側は新しい方が遺存状況の良いことは興味深い。また、その他の遺構や包含層出土遺物も、この時期を中心とし、11世紀後半～12世紀前半（土器集中区）から13世紀後半～14世紀前半（SK001など）までのものがある。SX201・202（集石1・2）も上述時期に含まれるが、人為的なものか否かを含め、機能は不明である。先述した第229次調査の石基礎との関連が想起されるが、標高や所属時期共に隔たりが大きい。また、集石1から出土した軒丸瓦は中国系と推定されており、注目される（常松1992など）。

調査区の近辺において、先述した道路状遺構が機能した時期（13世紀後半～16世紀）に、確實に伴う遺構はST016のみである。六文銭を副葬し、火鉢を転用した棺を持つ墓であり、16世紀後半～17世紀初頭に位置づけることができる。

文献 常松幹雄1992「博多出土古瓦に関する一考察」「法哈壁」博多遺跡群研究会会誌 第1号



① I 区

第1面全景（北西から）



② I 区

第2面（北西から）



③ I 区

第3面（北西から）



①瓦当出土状況（西から）



②SE045・046（南西から）



③出土遺物

(図8-23、図14-7、図16-9)

図版3



①調査区遠景（東から：左手前は第229次調査）



②II区 2面全景（北西から）



③II区 3面全景（北西から）



④SK043（北東から）



⑤SK001（北西から）



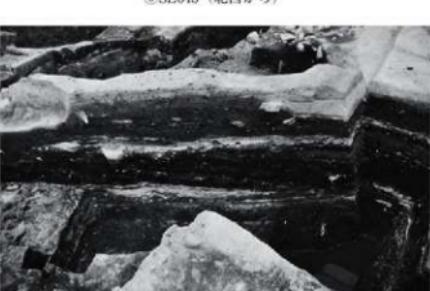
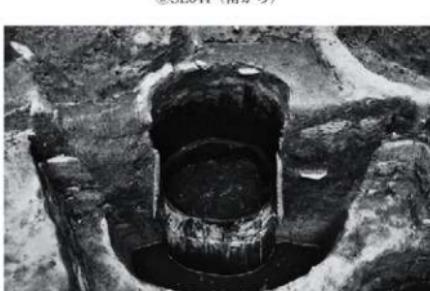
⑥SK031（南東から）



⑦土器集中区（南西から）



⑧埋壺（東から）



報告書抄録

ふりがな	はかた182
書名	博多182
調査名	博多道路群 第225次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1449集
編著者名	戸賀上 宽
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号
発行年月日	2022(令和4年)3月24日

遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
博多道路群 第225次調査	福岡県福岡市博多区 店屋町20-1他	40130	0121	33°35'48"	130°24'37"	2019年4月1日～2019年6月12日	128.4m ²	ホテル建設

所取遺跡名	種別	時代	遺構	主な遺物	特記事項
博多道路群 第225次調査	集落・墓	中世・近世	井戸、土坑、墓、柱穴	中国・国産陶磁器 瓦器 上部質上器 上部器 瓦 滑石製品 土製品	中国瓦(瓦当)の出土
要約			今次調査地点は、砂丘(博多浜)の縁辺部に位置し、自然堆積層上に存在する。遺構には、井戸、土坑、柱穴等があり、主に中世前半、特に12世紀後半を中心とする時期に位置づけることができる。集石遺構内から出土した軒丸瓦は中国系と推定されており、注目される遺物である。		

博多182

博多遺跡群 第225次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1449集

2022(令和4)年3月24日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 高松印刷有限会社

〒812-0062 福岡市東区松島1丁目4-10